

卷頭言——展望と提言——

島

亭

機関誌『日本の石仏』もようやく創刊より一年余を経て、本号で第六号を数えるにいたりました。当初心配したのは、原稿が充分に集まるかといったひどく大ものところの心配でしたが、予想以上に原稿が集まり質的にも次第に全体として向上していることは、いささか驚いてしました。第五号に統いて第六号を「庚申特集」[二]としたのも、一号分の入稿を上回る質と量の特集原稿が集まつた結果で、編集部の側が全く受け身となったほどの始末だったのです。ことに「庚申特集」では、「庚申懇話会」の主要メンバーの方々に参加執筆いただいたこと、野の石造遺物の研究では草分け的存在であられる服部清道氏の執筆をいたくなど、望外のうれしい内容となりました。

また、織戸市郎氏の俗信仰板碑に関する論文を契機として、川勝政太郎氏を中心とする「史跡美術同攷会」との交流が自然と芽生えてまいりました。同攷会会員の本協会会員への参加が生まれ、次号以後にその好ましい反映があらわれるものと期待しております。ま

ます。そして、思惟の広がりの場であることが、深まりの場でもあるような統合・全体性の場所が望まれます。

第八号では、「石工特集」を予定していますが、このテーマは私たちの石仏・石神研究の分野でありつつ、それにとどまらない広がりを持っています。これも最近のことですが、「産業考古学会」が成立し、各種産業の歴史考古学的研究、あるいは民俗考古学的研究の胎動が著しく注目されて来ました。この動きは、渋沢栄一氏以来の民具研究の伝統の熟成と深くかかわっています。石工研究に則していえば、産業考古学の立場から「石臼」「石垣」等の研究が進行していることが参考されましょうし、民俗学的立場からは「産業伝承」「職人伝承」の研究、橋本鉄男氏らの業績がかかわって参ります。また、歴史学の分野からは鑄物師、木地屋などでよく知られています。いわゆる「職人偽文書」の問題にもからんで参ります。「職人」の研究が日本歴史の再発掘・再構成のためにどんなに重要なかをよく示唆してくれたのは、網野善彦氏の『蒙古襲来』(小学館版「日本の歴史」第十巻)でした。石工の研究はそれだけの広がりと深さを持つもう重要な未開拓の領域として、私たちの雑誌でこそ、とりあげるべき研究の課題と思えます。

石工職人を含めて、石仏・石神の造形、信仰の伝播者を広く「芸能民」として把握するなら、石仏・石神の造立における宗教芸能民の態様といったことも、今後の重要なテーマとなりましょう。この面では、竹田聰州氏や五來重氏による仏教民俗学の業績が参考されましようし、中近世の芸能史研究の分野から意外な照射がありうるかも知れません。大護会長が明らかにされた共同体民の共同利害

た、交流とは一方的なものではないのですから、私どもの協会会員の方から、庚申懇話会や史跡美術同攷会へ新たに参加される方も今後多くなってゆくのではないかと期待されも致します。さらに、史跡美術同攷会の望月友善氏(本協会会員でもあります)らが、中心となつて結集されたばかりの「歴史考古学研究会」との交流なども新しい動向として期待されます。

本会の中心である大護八郎会長は、近世石仏・石神の研究の立場を、かねて「民俗考古学」「考古民俗学」的なものであると位置づけて来ました。それは、川勝政太郎氏を中心とする歴史考古学的立場と、方法・思惟において大きな隔りがあります。また、石仏・石神を造形論的思惟によって違う立場やその他さまざまの接近の方法、思惟があり得るわけなのでしょうが、今日私達に必要なことは、こうしたさまざまの思惟の広がりを一つの場に指し示してみせ、対話と止揚の契機を生みだすことだと思います。機関誌『日本の石仏』はこのような思惟の広がりの場、可能性の場でありたいと思っています。

にかかる原型的な宗教幻想に対し、中近世の宗教芸能民はどんな位相を持って石仏・石神にあらわれるのであらざるのか、この点はぜひとも解き明かされねばならない課題と思えます。石仏・石神の造形・信仰の歴史的な展開を克明にたどり、石仏研究の個別史において解明されねばならないものと思います。この課題解明の気運は、少なくとも道祖神と庚申塔研究においては、悉皆調査をはじめとする克明な探査の集積に基づいて次第に可能となって来ていくことが、本号までの機関誌の内容によっても、推知できそうです。道祖神造立の地域的な伝播経路や、庚申塔様式の江戸時代における流れなどについての示唆を読むにつけ、石仏・石神の流れを通してみた江戸時代の「庶民信仰史」といったものも、次第に浮かびあがり成立して来るに相違ないなどと勝手に想像してもみます。その点で本号の松村雄介氏の問題意識は注目すべきものだと思います。

石仏・石神の研究は、いま出発の端初についたばかりであり、全ては今後にかかるといえましょう。本誌の内容について、一方に瑣末な報告に脱しすぎて、石仏・石神への精神史的な思惟、あるいは文学的な思惟に欠けるとの批評もないわけではありません。この批評は、部分への専門化した調査が、石仏・石神の認識の全体性をそこなうものとなるという危惧によつていると考えられます。しかし、私達が求めているのは、徹底した方法的抽象が可能となるような場の設定であり、閉鎖的な傾倒ではない石仏・石神への思惟を豊かに広げる開かれた認識の場なのです。石仏・石神への傾倒が決して偏狭な趣味に脱するものではない知の場所として、『日本の石仏』がその役割を荷いうるものとなるよう念じる次第です。

卷頭言

大護八郎

学問という言葉は、福沢諭吉の「学問ノススメ」時代とちがつて、今日では何か古めかしい言葉のように感じられるが、『広辞苑』には「①学び習うこと。学芸を修めること。②科学や哲学などの総称。」とあり、「字源」には「まなびたづねる。易、文言『君子學以聚之、問以辨之』」とある。さらに学ぶということについて前者には「まねてする。ならっておこなう。」と説明されている。

言葉というものは時代とともにその意味が変っていくことが多いので、学問の本来の意であるまねてする、即ち模倣に始まり、不明の点を他人に問うて明らかにすることでは何か小学生の学習じみていて、大人のいさぎよしとすることではないように思われがちであるが、たずねるということを、問う意でなく探ねるとすれば、石仏のことについたずさわる人からは、わが意を得たようと思われそうだ。こんなことを言い出したのは、石仏に興味を持たれ、よく本も読み調査もされている人からの「私のほんの趣味でして、暇にまかせ足にまかせてただ石仏を見て歩き、写真を撮るだけで、別に学問といつたものではないですよ。」という言葉にひつかかるからである。

石仏を調査する場合、調査という言葉が気になるならば見て歩く、写真を撮つて歩くという言葉におきかえてよい。自由気儘に行きあたりばつたり目に触れた石仏を見るのも楽しいが、お互い多忙な寸暇をさいての石仏採訪となると、先人の踏査資料を参考にすることは結構なことであり、一種のまねてする、即ち模倣といふことにもなるし、それ自体『広辞苑』の学問に該当する。

自分で探そ者が誰かの探したあとをたどりながら、それらの中には何仏、何神なのか、また馬頭観世音とは分つても、何故に二つも三つも頭上にさらず馬頭を戴いたものがあるのか、それを知らうとするのは人情である。知るために居合せた人に問い合わせ、あるいは書物によつてそれを確かめることになる。即ちそれらの行為は明らかに「学びたづねる」とことで、立派に学問の本義に該当する。それを立派におこなつてゐる人が「趣味であつて学問ではない。」と何故言わるのであらうか。おそらく謙遜の裏には学問的(学術的)に価値の高いものではないという意味があらうが、学問の世界は無限であり、それを究め得た人々は、古今東西を通じてありうる筈がない。いずれも学問にちがいがなく、ただ段階、程度の差があるにすぎない。

こう考えてくると趣味にすぎないもので学問といふものではない、アカデミックなものはどうも困るという、それぞれの言ひ分、ともにどうも言葉にこだわりすぎているのではないかと思われてくる。しかしさらに言えば、後者を嫌う人々にはやはり言ひ分がありそうである。世に「獅子山に入つて山を見ず。」といつたとえがあるように、前世紀の考証学のように、考証のための考証に墮して、何故に重箱の隅をほじくるようなことをするのか、何のために

そうかと思うと石仏のことについて少しまずかしそうなこと、統計めいたこと、理論めいたことになると、「そんなアカデミックなことは性に合わない。」とよく言われる。また『広辞苑』でアカデミックというところを見ると「官学的、学究的、転じて非実際的。」とある。石仏の調査研究が官学的であるとは誰一人思っていないからうし、非実際的というにも該当しないであろう。ひつかかるところは学究的といふことなのかもしれない。学究的といふ言葉は辞典に頼るまでもなく、学問を究めようということに間違いはない。とすればアカデミックなことを嫌うということは学問をしようとする態度を嫌うということになる。もしそう考えていいわれるとすれば、これは席を同じくして語ることはできない。しかし再考してみると、学問をしようとする態度を、自らも調査し、他人の書いたものも読もうとする人が、毛嫌いする筈がない。そうするとやはり非実際的なものへの反発ということになりそうである。

非実際的とは、直接衣食住の足しにならないという意味でない

— 2 —

それを為そつと/orするのか、ともするとやつてゐる本人自身それが分らぬ場合が無しとしない。それを知りつつやるものもあるまいが、われわれ時に臨んで議論の末が瑠未のことからとんだ方向に発展し、さて今何のためにこんな議論をたたかわしているのか、お互い同志さえ分らなくなつてしまつることもよくあることである。心して学問している人々の間にも、ときのはずみによつてそうした迷路に踏みこんで、なおそれに気付かない場合もありそうである。これをもつて非実際的、アカデミックといふならば、誰しもアカデミックを嫌悪することになる。

しかしながら自分に難解になつてくると、これをもつてアカデミックとして斥けてしまふ態度は容認できない。

例を石仏の世界に限つても、その分野は極めて広範多岐にわたり、到底一人の能力をもつてその悉くを理解することは不可能である。今日石仏研究の世界はそこまで分化し、また深さを増しつつある。そのこと自体はまことに慶賀すべきことであり、これなしには今後の發展を期することはできない。全国にわたり、こうした多彩な調査研究に当つてゐる人々の集りが「日本石仏協会」である。その協会誌である「日本の石仏」が、毎号自分の欲する、読みたい原稿とばかりなりえないのは当然のことである。アカデミックと思われる原稿も、前述のような迷路に入ったものでない限り、これによつて裨益される何人もの会員がいるのである。理論と實際は車の両輪であつて、實際ばかりでは車は前進まないのである。

そうは言つても編集者は、なるべく多くの人々に喜んで読まれる原稿を中心にして、夢寝にも忘れたことはないのである。

卷頭言——石工研究の周辺

島亭

石工研究は、私たちの石仏研究にとって重要な一部門であると思いますが、また、職人史研究あるいは職能民史研究の重要な一環をなすものともいえます。この二つの研究にまたがるところに石工研究は位置しているといえますが、おそらく石工研究を深めれば深めほど、石仏研究と職能民史研究とは重なり照応して、歴史の重要な一断面を明らかにしてくれるのではないか。石工研究はまだ端的にいえばかりですから、そんな予測をすることもむずかしいことですが、将来の展開のために、石工理解の前提となるべき分業論¹分業の精神史とでもいうようなものの荒っぽいデッサンを私なりにしておきたいと思います。

(一)マルクスおよびヴェーバーの考察を念頭におきつつ、わが国古代の分業の形態を分類してみますと、(a)共同体内分業(自生的分業)、(b)部民制・品部・雑戸制の分業、(c)官衙・国衙工房の分業、(d)(都市)市場的分業、(e)種族的乃至氏族的分業、(f)非定着民的分業があげられると思います。(b)および(e)は部民制から律令制国家にいたる国家的管理にもとづく分業の形態であって、共同体内の自生的分業と種族的乃至氏族的分業(この中に渡米系・帰化系氏族を含めて考

える)を掌握し秩序づけることによって成立します。(f)非定着民的分業をあげましたのは、中世以後の姿では次第にはつきりと浮かびあがつてくる漂泊職能民がすでに古代に存したであろうことを念頭において分類にいたるもので。原始キリスト教の担い手が遍歴手工业者であったというような事例を、私たちはわが国古代の史実の中からまだ十分に抽出し得てはいませんが、サンカと呼ばれる漂泊種族民が「みのつくり」「かごあみ」や「まむしとり」を業としたら相貌を持つとの説などをあげてもよいと思います。また、これらの事例から(e)種族的乃至氏族的分業が(f)と密接にかかわるものらしいことが想定されます。かつて部民制的分業や品部・雑戸的分業において有力な位置を占めた氏族が凋落し、漂泊職能民となつたといった事態を想定すれば、(e)における(b)→(f)のような関係が生じます。ここで「分業」という名のもとに、遍歴宗教者のごとき職能まで含めたのにはそれなりの意味があります。

(二)古代專制国家の生成とは、農業生産を基幹とする貢納收奪の体制化であります。ここでは、農耕民こそ基幹であり、農耕以外に從事

する職能民であっても基本的には農耕にたずさわりつつ各々の職に従事していたわけですが、これらの農耕以外の諸職に従事する人々の技能は、特殊な能力として、「能」とか「芸」という一くるみの観念によって意識されてきたと思われます(この観念がはつきりととり出されるにいたつたのは古代末でしょうが)。殊に、遍歴漂泊の職能民のような場合には、農に従事せず異人として共同体を訪れ、「芸」や「能」と食の糧を交換したと考えられますから、農耕民の認識において彼らは「能」や「芸」において類別される特殊な民と觀念されたでしよう。この場合、「能」や「芸」と呼ばれるものの中には、精神的分業とでもいべき宗教的能力も含まれれば、性的な分業としての「遊び女」も、あるいは異常な力の持ち主としての「力持ち」も含まれましよう。「芸能」と今日呼ばれている観念よりずっと幅広い職能が本来の「芸能」であって、もっと極言するならば、武に秀でた「武士」でさえ「芸能民」の觀念からその発祥の一端を理解できるところがあるようと思えます。

(三)したがって、ここでいわれる「分業」とは、現在觀念されているような社会的生産の分割ではなく、「農耕民」と「職能民」²「芸能民」という双分的に分割された共同的な觀念の姿なのです。この双分的な共同の觀念の中では、「農耕民」が普遍とすれば、「芸能民」は特殊として、農耕民の疎外形態として了解された。それ故にこそ、「芸能民」は「普遍」³「普通」に対して時に「聖」であり、時に「卑」「賤」であるという特殊な身分認知がやってきたとみられます。この認知は「農耕民」と「芸能民」を分割する共同的な觀念そのもののうちに、呪的な宗教性(自然宗教)が介在することに

よって成立します。分業と身分が未分離な一定の形態のうちに、呪的な宗教性をひきずった社会的生産⁴分業の段階がみてとれます。四さて、手工業をはじめとする諸職芸能の発展は、在地生産⁵分業が地域的な市場や都市の市場と結びつき、自由な交換が少しづつでも展開して行くところに生ずるものでしょう。官衙・国衙における國家的分業は、隸属的な分業として国家体制の盛衰に依存しますから、技術的な洗練はあっても、自立的な発展はありません。また、種族的乃至氏族的分業、非定着民的分業も地域的な市場を掌握する担い手や都市市場の担い手に転化し得ないかぎり、自立的な発展は望み得ないと思われます。諸職芸能民が自立した市場交換を獲得しうる度合、あるいは伝統的な権威を根拠として市場を制限することなく自由な競争を得る度合に応じて、自立した職能的エートス(倫理)の觀念を一般的には身につけるにいたると考えられますが、わが国古代・中世の諸職芸能民には、このような自立的な発展は極めて微弱であったようにみえます。それは農耕民から一くるみに類別された「職能民」⁶「芸能民」の觀念が、いつも農耕共同体を主体としてその疎外・補完として意識されつけたところにあります。上層の政治共同体は、底辺の農耕共同体を貢納によって収奪し、また必要な庸役を課しはするが、自給的な農耕共同体の共同觀念には手をつけないというアジア的共同体の仕方では、諸職の分業を国家的に收奪して隸属民化するか、農耕共同体の内部に分業を押し込めるかのいずれかの道しか基本的には許さなかつことによるともいえましょう。このアジア的な觀念のくびきが「職能民」「芸能民」の精神を圧しているところでは、自由な市場に登場する職能

的なエートス（倫理）はなまなかに生じ得なかつたと思われます。

農耕共同体（大地・自然）を基幹とする自然宗教は、農耕民にとつては即目的なものですが、むしろ職能民において即目的なものが対自化され、農耕民の魂を管掌するものは職能民の宗教祭祀であるといった双分的な共同観念が自立した職能的エートス（倫理）に代つて、職能民の観念を永い間支配したようと思われます。こうした双分的な自己把握においては、相互に反照したエートス（倫理）が生じますから、農耕民の内面に宿る聖と俗あるいは貴と卑の転換は、外的な職能民との関係に対象化されます。職能民もまたこの対象化を反照的に内面にくりこむのです。

(iv) 農耕共同体を基盤とするこのような自然宗教＝共同宗教は、双分的な分業（分割、類別）観念のダイナミックスを内包しつつ、古代から中世、近世あるいは近代にいたるまで永続的に私たちの観念を支配するくびきとなってきたと思われます。中世末から近世に形成される商人のエートス、あるいは農耕民の内部に生まれた篤農的なエートスなどは、職能的エートスの分化発育を示すもので、ようが、近代にいたるまで持続する農本的観念の背景に、このような共同宗教の影をみて取ることはできるでしょう。私の考えからすれば、聖と俗のダイナミックスに文化発展の原動力をみることも、あるいは底辺の自然共同体に原本的な「社稷」の理念を置くことも、この双分的な観念の分割を解体し止揚とは異なると思えます。

ト、帰化人石工の活躍が想定されましようが、何故石仏造立が他の仮像に比して遅れて盛行するかという大きな疑問があります。私はこの問い合わせにうまく応えられませんが、平安前期頃に生じた官衙・官寺工房の解体が重要なかかわりがあつたらうと想われます。仏教彫刻史家によつてはこの時期に古代彫刻美術の解体を見る方もおりますが、私もこの見解に賛成します。官衙・官寺工房に対して、都市の自立した市場工房としての道を歩みはじめた定朝一派が、寄木造の技法を創出することによって、この地歩を獲得したことはよく知られていますが、一方、一木彫成の伝統は地方へと伝播し、仏師以外に漆工・金工等の技術を要する多様な技術の積み重ねによる仏像造立よりは、より素材原質的な木彫像への志向が生じたと思われます。最も素材原質的ともいえる石仏造立が期を同じくし盛行していくように思われます。つまり、官衙・官寺工房が解体する一方、地方土豪の祭祀に対する仏教施設に対応しうる職能民の地方伝播が顕著にみられる事態となつたのです。この素材原質的な木彫成像、石仏の造立は、樹木や石に聖なるものをみる自然宗教の祭祀儀と溶解することによつて、豪族を長とする農耕共同体の祭祀に照応しうる信仰像であったことは想像できます。また、仏教の地方伝播に私度僧のごとき漂泊宗教者の関与するところがみられる「なた彫」の存在が古代末には次第にその姿を顕わしてきます。

(v) 在地的な石工の伝統を考へる場合、石垣や溜池、灌漑路、井戸など農耕共同体の存続に要する石工事業の分業がどこまで時間的に遡

ることができるか知る必要がありましようが、中世から近世に至る歴史の中で、こうした石工事業の在地的地域的な職能民の定着が、石仏の在地的地域的な職能的生産の基礎となるものだつたことは確かだと思われます。中世末に登場する穴生の石工集団は石垣や灌漑路などの農耕施設に大きく関与していた形跡がうかがわれますが、同時に収山下の諸職集団の一員として彫しい石仏造立に関わつたと思われます。彼らは在地的な集団であると同時に、収山によつて管掌された諸職集団の一員として、氏族的な職能集団の尾を引いて來た民とも想定されましようし、穴生に近い小野神の祖地を考えれば、漂泊職能民の伝統をも荷つてきたことが考えられもします。(vi) 近世石工の家筋に残る「石工由緒書」が今回はじめて紹介されてゐます。これらは他の職能民の家筋にこされた由緒書とともに、通常「偽文書」とみなされるものですが、ここには職能民としての石工が、その職能的エートスを先に述べたような双分的な職能觀の内部において、伝統的な権威つけを擬制的に繼承して來たことを教えてくれます。この心性は、農耕民を主体とする自然宗教のくびきの内にありますから、石工による石仏造立の宗教的心情が地をはうような大地性、自然信仰としてのおおらかさと、地につながるような悲しみを合わせ持つてしまつたのは至極当然のこととなりましよう。それは、農耕民の心性にも反照するものであり、私たちがまた石仏に悲哀といわわざれた至福を得するのもその故であると思われます。近世石工の造立した夥しい石仏の中から、こうした自然宗教との葛藤を内化した個我性の表現をどれだけ弁別できるかは、それ故、重要なテーマとなつてくると思われます。

(vii) 石製品の生産において、共同体内の分業あるいは石製品に適した石の原石地を有する共同体による地域的な分業交易といったものは、おそらく繩文中期頃にはすでにみられるもののようですが、弥生時代から古墳時代にいたつて一層はつきりとした分業の形を取ることになります。そして、部民制のもとに石作部などとなつてあらわれてくるのでしようが、この段階では石製模造祭祀物や古墳の建築のような祭祀葬制の宗教的役務に石工の仕事が向けられていたことが重視すべきことかも知れません。出雲における忌部の石作のように、祭祀を司る忌部の部民として石工集団が登場しているなど、彼らは部民制国家の祭祀・葬制に必要な石製品を制作するために統轄された分業集団でした。しかし、石製模造祭祀物の使用古や墳の築造そのものが終末する時点では、これらの石工集団は解体をよぎなくされます。薄葬令、火葬の施行によりもがりに奉仕した遊部が行基にひきいられる隱坊集団に転化したと推定されるよう、行基の行なつた土木事業等には、このように解体した部民分業集団の救済と再組織のあとがみてとれましよう。部民分業集団は、分業集団として自立しうる市場を持ち得ませんでしたから、農耕民に還帰するか、何らかの他の職能民に転化するか、浮浪漂泊民となるかの道を選ばざるを得なかつたと思われます。石作部の伝統が石仏造立に管掌し得たかどうかは、この解体以後の経路をたどりきれなければ解明できません。

(viii) 仏教文化の輸入によって造立された仏像は、金銅造、乾漆造、塑造、木造が多く、新羅仏教に多くみられるような石仏の造立はむしろ平安期に至つて盛行します。この盛行には新羅仏教のインパク

卷頭言

大護八郎

「ローマは一日にして成らず」という諺があるが、物ことは短兵急にして成功するものではない。石仏研究、わけても近世以降の民間信仰の上に立った石仏は、ほんの二、三の先覚者の業績を除いては、その調査・研究の発表が世に出たのは、戦後も僅か二〇年前からのことである。それが近年はまさに百花繚乱、刊行される石仏関係の図書も応接に暇無い程であることは、お互いご同慶の至りである。

しかし盛況の反面には、実に多くの未消化の問題が排出し、しかも逐年その度合いを強めていることは、殊に若い、これら石仏研究に入ろうとする人々にとつては悩みの種になつてゐる。例えば石仏の形態についても、駒型、角柱型、舟型、板碑を始め十数種に分けられているが、人によって呼称はまちまちである。また双体道祖神の二神の姿態についても祝言跪座型、抱擁手型、拱手型から相対型、相対抱擁型をはじめ、数多くの呼称があり同じものについても様々の呼称がある。

それによつて概ねの実態は想像されるにしても、多くの文献から統計でもとろうとする処置に困ることとなる。また石殿といい石祠といつても、そのけじめのつけにくいものもすくなくない。いろいろと考えあぐねて独自の呼称をつけられた人々の苦労は充分に理解されるところである。

今まで主に所在・調査所在報告を中心とした石仏調査の時代であったが、いつまでもそれに終始しているわけにもいくまい

し、個人調査では九牛の一毛にも及びきれない無数ともいふべき石仏であつてみれば、先学の文献を充分に駆使して研究に入らなければならぬ時代は既にやつてきてゐる。既に百年近い研究史のある古石仏や石造塔については、宝塔一つを例にとつてみても、宝珠・請花・九輪・伏鉢・露盤・塔身（首部・軸部）・基礎という術語は、誰一人疑うこともなくその名称を踏襲して、共通の術語として使用して混乱は無い。近世以降の多様の、しかも地方色豊かで、必ずしも準拠すべき儀軌的なものにこだわらなかつた石仏においては、そう簡単に名称を統一することは困難であろう。その異形の極めて多い石仏の様式であつても、その基本的な名称を統一することは必ずしも困難ではない。様式が多様であればこそ、却つて基本的なものの名称統一が一層必要であるのである。

こうしたことは主觀的であつてはならないことは勿論、できるだけ多くの人々の知慧を集めてなさるべきであり、でき上つた結果が大方の共感を得ないことには何にもならない。とかく人間誰しも他人の決めたルールを守ることは、沾券にかかると思ひがちなるものである。しかしよりよいもの、より便利なものであつたならば、大乘的見地から、他人のためにも自分のためにも協力共鳴を惜しむべきではなかろう。

幸いに全国各地から八〇〇人以上の会員が集まり、それぞれの分野にも多くの専門家のいる日本石仏協会は、こうした面にも手を携いている時期ではないと考へる。今年度から先ず道祖神関係の研究者をもつて、道祖神の様式上の名称についての研究部会を組織してことに当るべきものと思う。逐次その部会を増やして他の分野にも及びたいものである。勿論单年度で完成は無理であり、一応の試案が出来た時点で『日本の石仏』誌上に発表し、さらに多くの人々の意見を求め、逐次煮つめていつて、「日本石仏協会案」として江湖に批判を求め、拙速を避けて息の長い事業として取り組むべきものであろう。

大方の納得のいくものができれば、将来の一つの拠りどころとなるであろうし、納得が得られなければ自然淘汰されるであろう。今その結果を云々する時期ではなく、誰かが手を染めないことには進歩を期することはできない。どこかの会で、あるいは誰かの成案が出て、それがよりよいものであれば、進んでそれに就く度量だけは、本協会としても持つべきであろう。

卷頭言

大護八郎

馬頭観音の特集号を編集するに当って、石仏の中ではその絶対数が全国的に見て最大であると考えられるにもかかわらず、道祖神や庚申塔の研究家に比べて、これを対象とする研究家の案外少ないと痛感された。

石神・石仏の研究家の多くが、多彩にして像容の愛すべきもの、珍奇なものにおのずから関心が集まるのは当然であろう。けれども馬頭観音のようにその大半が近世以降の所産であるものについては、石造美術としての視点もさることながら、やはり人間の生活に密着した馬に関する民間信仰を抜きにしては、像容の地域性も、その多彩さの抛ってきたるところも明らかにすることは不可能であろう。馬に関する民間信仰は、民俗学の対象であり、既に先学によって、多くの述作がなされているが、厖大な数にのぼる石造馬頭観音像についてはあまり手を染められておらず、石仏研究家の研究領域として、これから、精細な調査・研究がなされねばならぬことは、石仏としての絶対数が最多と考えられることからも当然のことと考えられる。

ただ馬の飼育が激減した今日にあっては、往年の馬産地においても馬の守護神への関心が急激に薄れ、探訪にもそれだけ困難が伴なうが、今日ならまだ且つてわが子と同様に馬を愛してきた人々がいるので、なお可能性は少なくない。先日私は山の神像の探訪を兼ねて、遠野をはじめ東北地方に足を入れて、早いうちに探訪しておかないと贋を喰まねばならないことを痛感した次第である。

民間信仰の上に立った石神・石仏の調査は、民俗学徒とは別の視点で、即ち造立された「物」より、多彩な信仰の実態と、それから帰納された信仰の本質を明らかにすることに目的を置かねばならない。その過程は民俗学とは必ずしも一致するものではないが、その本質の考索は、民俗学徒の労作と、石神・石仏研究家の成果と、併せてなされねばならないことを、最近になって私はつくづく感じとっている。双方とも単独では全きものとは到底なりえないものである。

現地を訪れてみて痛感することは、伝承それ自体はしだいに忘れ去られつつあり、ただ聞くだけではとかく通り一遍の表面的な話になりがちであるが、石神・石仏の多彩な像容や、社殿の数々の奉賽物には不可解のものがすくなくない。その一つ一つについて根気よく尋ねてみると、案外古い信仰の痕跡が浮かび上がってくるが、中には昔からそうしているというだけで既にその意味は伝承の枠から外れているものが少なくない。遠野地方とその周辺に山の神・駒形神社・稻荷神社・金精様を探ねてみると、その間に驚くべき程の習合と混乱と忘却の多くを見てとることができた。これらを仔細に分析し検討することによつて、民族の信仰の本質と発展過程をたどることができるとの自信を得たのである。一つの生活環境・生活形態の中にあっては、山も猿も狐も、馬も人も、さらには河童も蛇も渾然と一体になつて、その信仰の展開に当つてはさまざまの習合と発展が当然のこととしておこなわれるのである。

なおまた今までいろいろの機会に述べたように、馬頭観音一つを例にとってみても、仏説七觀音の一つの馬頭観世音は、まよストレートにそれを受けた信仰はあるにしても、地方地方の馬頭観世音信仰は決してそんな单一のものではなく、その地方に古代より育ってきた馬の信仰との習合がより多く作用している。それのみか六・七世紀の頃中國で漢訳された馬頭観世音に関する經典が、留学僧等によって日本に将来され、平安時代に密教の盛行とともにこの国の仏教の中に育つていった馬頭観世音信仰は、わが国独自の発展をみつつ地方に伝播し、地方においてはそこの伝統的な馬に関する信仰がより強くその中に吸収されて、寺で説く馬頭観音信仰も地方色豊かなものとなつてそこに根づき、今日に至つているのである。